



第66号
平成19年(2007)
1月21日発行
(年4回発行)

正式俳諧

青木秀樹

十一月四日(土)岐阜市で獅子門道統四十一世に就いた大野鶴土さんの立机式が挙行された。鶴土さんは信州大学で東明雅先生の教えを受け、郷里岐阜に帰って国島十雨師のもとで修練された獅子門のプリンスであった。式は来賓と一門合わせて二百名の盛会で、獅子門の存在感を強く内外にアピールするものとなった。私は新道統の一友人として参加したつもりであったが、事前に何のお知らせもないまま、小林静司さんとともに正客の席に着かされ、式を締めくくる焼香礼拝に指名されたのには大いに戸惑った。

立机式の構成には会派によって、また事情によりさまざまな様式があるようだが、今回の式は芭蕉像を前にした「正式俳諧興行」と「吟声」が中心であった。式場の床飾りは正面に芭蕉像を安置した厨子、前面に花、燭、

供物、香炉、背面に天神像と三類図(さんちようのず・支考筆)が掲げられている。前道統と新道統の挨拶の後、正面に据えられた厨子を開扉、挿花、献花が行われた。正式俳諧の宗匠は新道統、執筆は道統補佐の瀬尾千草さんが務められた。

正式俳諧の進行、役割分担などは伊勢派の流れをつぐ芦丈師・明雅師から受け継いだ私たちの正式俳諧とは相当に異なる。獅子門の正式俳諧の特徴は、ひとつは「執筆の負担が軽いこと」、文台捌きに重きを置かず、文台の持ち運び等は別のお役の人が行い、付句の捌きと吟声に専念する。二つ目の特徴は「句の受け渡しを口誦で行うこと」、三つ目の特徴は「仏門色が強いこと」である。

立机式では余興の巻百韻(名残の裏)の一門による付合が行われた。付句をしようとする連衆は「御前句(ごぜんく)」と声をあげ、執筆の前に進む。執筆が前句を読み上げると、付句を五七五あるいは七七に切って誦し、執筆はそれぞれ復唱して句の受け渡しが行われる。執筆が付けてよいと判断すると宗匠の意を伺った上で、その句を誦して懐紙に書く。不採用の場合は再び前句を読んで付句を促す。今回は不採用のケースも実演された。小短冊を用いる場合と違って、付けようとしている句を連衆全員が聞くことができるメリットがある。連句が文字で読むだけでなく耳で聞くものだということがよくわかる。

今回の立机式では本巻百韻、祝章句、余興百韻の順で吟声の役の方々によって吟声・披露され、懐紙を芭蕉像に献じ、最後に焼香・合掌礼拝で終わった。若い道統宗匠の下で獅子門がますます活性化することを期待させる立机式であった。

見掛けの作法などは異なるものの、正式俳諧の底に流れる精神はまったく同じであると感じられた。「古松新濤」(別所真紀子著)に都心連句会の清水瓢左師がことあるごとに正式俳諧をしようと言われたとの記述がある。明雅先生も正式俳諧を大事に考えておられた。以前猫蓑会の将来像を話し合った際、猫蓑会が発展すると多くの惑星群からなる組織になるのではないかと申し上げたところ、「そうなる」と正式俳諧ができなくなるね」と言われた。明雅先生の悲しそうな顔が忘れられない。正式俳諧は単に昔の俳諧の席を再現する儀式的意味合いだけではなく、俳諧の精神を学ぶ場であると理解するべきであろう。

芭蕉から三百年余り多くの俳諧宗匠によって受け継がれてきた連句を、私たちはいま学んでいる。芭蕉が当時の新風であったように、私たちは現代の生活、現代人の心理に基づいた「現代の世態人情風交詩」を創作する努力を重ねることが重要である。いたずらに懐古趣味に走ることも、やみくもに革新風の表現に突き進むことも蕉風の精神にそむくものである。

九月三日の第六回全国連句新庄大会の会場で、見知らぬ人から声をかけられた。

「私は先生の『連句入門』ばかりを頼りに連句をはじめ、お蔭でこの大会で入選しました。一言お礼申し上げたくて」とその人は言う。見ればまだ若々しい壮年の男性の方であった。従来もあの本だけを頼りに、いわば連句を独学した人は多いようで、私も時折りそのような人に接したが、今度のように、それで入選できる程まで力を付け得た人は極めて珍らしい。

夜半亭几董は蕪村門の逸材であるが、彼の名著と言われる『付合てびき蔓』の序文で次のように書いている。「俳諧の書、いにしへより少なからずといへども、付合の意味などことに書籍のうへにてはわきまへがたき事多し。されば堪能の人に会し、度を重ねて議論を聞、まどひをとき、而して後自得・勘破しはじめて俳諧を知べき也。されど不幸にして口受すべき人を得ざれば、自己の誤を正すの便りなく、卸而他の僻論・感説を聞いて、病を伝るの失有。あはれよき師をえらび、口づから受得て修行を専とし、自然と発明するの外はあらしかし・・・」

私も先師芦丈先生から全く同じことを教えられた。それで、『連句入門』を執筆している時も、これがすぐ実作に大きな効果を上げ

るとは実は考えていなかった。

明治以来、文芸の世界の片隅に追いやられ滅亡寸前になった連句が、漸く子規・虚子の呪縛から解放されようとしたのが昭和四十五年頃であるから、私があの本を書いた昭和五十三年は、まだまだ連句に対する誤解・偏見がみちみちていたのである。

私はまずこの謂れない連句に対する誤解・偏見を取り除き、世間の人に連句というものは、どのような文芸であるかを知って貰いたかったのである。

それで、全編を五章に分け、第一章に連句（俳諧）を芸術的に完成した芭蕉の紹介、第二章歌仙の構成、第三章式日、そして第四章に連句のメカニズムとしての付けと転じを説明し、最後の第五章に芭蕉の作品「冬の日」を紹介して、連句の芸術性の説明をした。面倒だと考えられていたものを、一応整理して、ともかく連句とはこういうものだと言術としての全貌が分かっていただけたのではあるまいか。

もし、この本を実作により役立たせるためならば、付け、あるいは転じ、ことに転じの中心となる自他場の説について、もっとくわしく述べるべきであったし、私も実は述べたかった。しかし、あの当時としては、あまり細かなこと、また新しいことを述べると、一層初心者をもどませ、連句離れをおこしかねないので、心ならずも割愛した次第であったが、心あり、才能ある人は、これでも十分連句の真髄を会得されるという証明が出来たこ

と、私は大変うれしかった。

「捌きの役割」

捌き手（宗匠）は、よくオーケストラの指揮者にたとえられるが、私はむしろ、海図もない未知の地へ向かって船出した船長に似ていると思う。

オーケストラには既に楽譜があるが海図のない船長は、あらゆる彼の知識・経験・カン・情報を駆使して、船中の各員がそれぞれの任務を忠実に果たすように注意しながら、船を進めなければならない。

俳諧にも、楽譜や海図に似たものはない。捌き手は前途の保障は何もないままに、一座の連衆を指導して作品を創り上げて行かねばならない。それには一巻全体の構成を考えて、それに従って連衆の作って提出する一句一句を吟味・添削しながら、時には自分も出句して進めてゆく。だから俳諧の方式や故実に通じているだけでは不十分で、ある時は連衆を鼓舞し、あるいは落ちつかせ、時には暗示し、時には直接要求して変化に富んで、おもしろく、しかも調和の取れた新しい一巻を纏め上げねばならない。

このように、捌くということは大変難しいことであるが、見事、一巻を捌き得た時のよろこび満足感は格別である。

第二十七回俳諧芭蕉忌

第二十七回俳諧芭蕉忌

明雅忌脇起二十韻

「藍は空より」

内田 麻子 捌

平成十八年十月十八日

於 江東区芭蕉記念館

役割

宗匠	倉本 路子
脇宗匠	青木 秀樹
副宗匠	高橋 豊美
執筆	松本 碧
知司	根津 忠史
副知司	横山 わこ
座配	松原 弘子
座見	内田 遊民
花司	武井 雅子
香元	遠藤 央子
配硯	佐々木有子
同	松島アンズ
同	西田 一枝
老長	原田 千町

旅人と我が名呼ばれん初しぐれ

木守残る鈍色の空

アニメーション絵コンテ準備進むらん

ゾウさんが好きワニさんも好き

平原を行く長い汽車月登る

芒を提げて辻まがる影

をとり籠運命にあらがふ女なり

恋つらぬきて白蓮の道

この町の銀座はセール真最中

ラーメン塾で学ぶノウハウ

ナオ 故郷の山蚕艶なすたなごころ

氷室の雫月の涙か

どどどの音を合図に幕を引く

隔てる席へ送るウイソク

脳外科医こんどの彼は刺激的

草野球では四番を打つ

ナウ 豆腐屋の喇叭とぎれて風にのり

淡島祭潮上がる頃

振舞ひの鏡開きし花の宴

匂へる土に描く壽

龍胆の藍は空より滴るか

山路辿れば白き残月

雁の音の途切れ途切れに届き来て

パッチワークに励む妹

お隣と窓越しにするお裾分け

貴方の声の妙に艶めく

香水の変はるたんびに替はる彼

桜桃忌には臨時バス出る

波高し東シナ海島の影

毛並みよろしき若き宰相

ナオ 飼猫に朝食のハム食べられて

すき腹で乗るヘルスメーター

魔がさしてふと誘はれる他人の夫

火燧の足のぐつと寄りくる

凍月の木曾街道に税立つ

刑事ドラマに酒をチビチビ

ナウ バリウムを飲んで行方を確かめて

霾ふる日には磨く鏡台

すれ違ひ振り返らるる花衣

蜂の巣作りたゆみなき軒

明雅 仏

麻子

守男

和代

守枝

かりん

ん

男

代

麻

枝

男

代

男

枝

ん

枝

男

連衆 近藤守男 長崎和代 谷本守枝

登坂かりん

「残菊や」

副島久美子 捌

残菊や翁ゆかりの湯の匂ひ

明雅仏

橋のたもとに細き虫の音

久美子

月の窓新刊の書を繕きて

郁子

時々つまむ瓦煎餅

了齋

鎌倉の台湾リスの逃げる道

樹子

袖ゆるりと身に纏ふひと

碧

ほんのりと珊瑚色した耳のたぼ

アンズ

君のルージユの味に慣れたり

齋

みんなの声満ちてくる庫裡の奥

碧

噂話の続く片蔭

樹

ナオノーベル賞親子二代で受くるてふ

郁

ボルボロールスロイス渋滞

ア

許しません飲酒運転美女だつて

碧

暖炉ますます煽るときめき

樹

雪の精抱かぬと怨む月影に

碧

ママと泣いて眠る人形

ア

ナリ傘寿過ぎ小学校の友の文

郁

春の星より遠き故里

齋

花大樹登つてみたき梢まで

久

琴弾鳥の鳴き交す宮

郁

連衆 東 郁子 鈴木了齋 高橋樹子

松本 碧 松島アンズ

「縁日」

豊田 好敏 捌

秋しぐれ芭蕉稲荷はご縁日

明雅仏

ビルの谷間に出でし十六夜

好敏

新煙草金の帯び封引き切りて

豊美

特集記事はまたもあの顔

美奈子

ウ サングラスわが妻ながら目を見張り

淳子

しとどの汗も香ぐはしき君

一枝

酒一杯ぐつとあふつて酔ひつづれ

枝

新米刑事に説教をする

奈

停電の交差点では手信号

淳

越前蟹も品不足とか

豊

ナオ寒すばる機窓に仰ぐ北の海

奈

温泉付きのログハウス買ふ

豊

生意気にチョコの銘柄あれこれと

淳

協奏曲は低く始まり

枝

天使魚斜めに月の射し入りて

淳

前略後略短夜の闇

奈

ナウプラダでもシャネルでもよし貰へれば

豊

まづ仏壇へ初のサラリ!

枝

村あげて洗濯はげむ花の下

敏

咽喉をならして仔猫親猫

淳

連衆 高橋豊美 鈴木美奈子 上月淳子

西田一枝

「紙剪れば」

式田 恭子 捌

紙剪れば紙にも秋の声生まる

明雅仏

二夜の月を愛づる広縁

恭子

一位の実兄の丈まで背伸びして

忠史

消えずに残る蠟石の跡

有子

ウ アベマリア修道尼まだうら若く

千町

ほてった頬をはさむ掌

京子

気がつけば早々と来る鶴

庸子

海をへだてた国のあり方

町

秃山を滴る山と変へる会

庸

青いハンカチみんなお揃ひ

史

ナオ宝塚ライダンスの脚高く

有

いつか失くしたあんな想ひ出

京

荒城の哀史を読んで涙ぐむ

庸

狐を祀る暗闇の宮

町

抱きしめる影まで瘦せる冬の月

京

恋は新たな旅のはじまり

町

ナリこのところ医者が居つかぬダムの村

庸

自転車とばす納税の時期

史

枝垂れ花咲くほどの色の淡くなり

有

少し口開け蛤の夢

京

連衆 根津忠史 佐々木有子 原田千町

鷺山京子 久保田庸子

「蓬萊に」

杉山 壽子 捌

「七部集」

島村 曉巳 捌

「七部集」

青木 泉子 捌

蓬萊にこの神在し豊の秋

明雅 仏

秋灯恋さまさまの七部集

明雅 仏

秋灯恋さまさまの七部集

明雅 仏

高く積まれる新酒奉納

壽子

細き肱に後の月射す

曉巳

庵の池にみせばやの月

泉子

月明し御著書にサイン賜りて

文子

吊り籠に榛の照葉をさし添へて

志世子

青蜜柑漆の盆に盛るならん

要子

墨の匂ひのよきも嬉しく

常義

付け人つれて楽屋入りする

弘子

茶柱よけてひと息に飲む

士郎

ウ 海岸線太平洋を左手に

央子

水呑めどなかなか醒めぬ雪見酒

あかり

新幹線通りし町は様変はり

路子

ウ ノートパソコン恋を呼びだし

英子

凍土に埋もれ放置自転車

弘

みそ蔵直しギヤラリーにする

利子

ご機嫌ようウインクもして可愛い娘

富美

国境の深紅の旗が揺れやまず

り

嬬やかな弦楽重奏四姉妹

士

珊瑚の根付忘れものです

義

髭剃る間無し特派員には

弘

父は無趣味の頑固一徹

路

覗きこむ影も映せり水中花

央

贖物を判じきれずにストレスに

世

散る合歓を鯉がパクリと食べる午後々々

映画監督掛ける藤椅子

文

チェスのゲームに僧止の駒

巳

籐椅子に寄り夢心地なり

利

ナオ合唱のコーダは遠き昼下がり

義

ナオ赤富士の盆地に生まれ球を蹴る

り

ナオ長安の僧は酒屋で経を読み

士

茶色鴉が維納の森

文

釜飯の釜持ち帰る母

弘

熱が入ると轆轤蹴る癖

要

安保理の全員一致珍しく

英

靴振れば砂漠の砂と歌声が

り

何なのさ下着まがひのあのファッション

風を舞はせつ雪女来る

義

ブルカの奥で誘ふ目差し

世

霜焼けの指舐るいとしさ

要

極まりてマントの中に抱く月

央

きぬぎぬの短さ恨む夏の霜

り

凍月を小姓と仰ぐ旅枕

士

チーズ蕩ける火傷しさうに

美

草螢這ふ畝の片隅

世

核の在処は知る人ぞ知る

路

ナウ生まれのち思へば夢のごとく過ぎ

央

ナウシルバーパスかかさず通ふ映画館

り

ナウお好みの香たきしめて客迎へ

利

調教したる仔馬三冠

英

春の愁に開くアルバム

弘

いたずら童子つつく姫虻

要

満願に花の衣を誂へる

壽

住吉社磯の礎石に花筏

巳

ここかしこひとの山なす花見時

泉

うららうららと上るタラップ

英

姫貝発見子等の輪が出来

弘

頬をかすめて過ぎる柔東風

利

連衆 橘 文子 生田日常義 遠藤央子

連衆 秋山志世子 松原弘子

連衆 山本要子 横井士郎 倉本路子

佐古英子 村田富美

中田あかり

武村利子

「水の秋」

小池 啓子 捌

「明治の窓」

中林 あや 捌

「お局様」

横山 わこ 捌

水の秋昔深川橋幾つ

明雅仏

道後の湯明治の窓の十三夜

明雅仏

秋海棠お局様の御文台

明雅仏

籬の菊をめづる佛

啓子

「いなごぞなもし」またも空耳

あや

月のあかりに浮ぶ横顔

わこ

音又打つ月の光のつややかに

孝子

依編留学生に教へゐて

佳之子

軒高く尾越の鴨を見送りて

良子

マイクテストはいつも晴天

洋子

鞆のキーの赤いイニシャル

美恵

ボードゲームに兎等と興ずる

遊民

助教授は一木彫りに魅せられて

嫺

あの時のふとしたことが気にかかり

弘子

黒が白白が黒へと変はりゆく

千恵子

瞳が語る愛の告白

雅子

誰やら覗くやぶれ枝折戸

敏女

虚実皮膜のかけ引きの妙

秀樹

丸顔の丸さ幸せ太りです

鐵男

扇にて恋の薫りを聞かせ来る

ゆみを

彼の君の誘ひに乗ってみようかと

良

出勤パパは保育所に寄り

雅

指紋と汗のついたケータイ

恵

おまけ目当てにキャラメルを買ふ

千

飛鳥二号の写真の下は壁の染み

孝

デイバック背負ひ円空仏の前

之

路地の奥蚊取線香必需品

樹

手紙入る瓶灼くる砂浜

鐵

長良の流れ西へ大きく

を

囃子ゆつくり通る山鉾

千

ナオ携帯で株を注文藤寝椅子

嫺

ナオ酒蔵に様々な菌棲みつきて

弘

ナオエスプレッソマスターの髭異国風

同

黒幕の人義足鳴らして

洋

しみじみしゃぶるあたりめの疔

之

ナイフ一本もて余しつつ

良

ランボーの好みし酒を口移し

鐵

ドラフトは少し希望と違へども

女

人念に館の下を掘り進み

民

懺悔の涙流す聖堂

雅

キスをおねだりクリスマススイヴ

弘

執事がもらす女王の恋

樹

月冴えてただ狼の影長く

洋

月の影雪国一の雪女

女

冬月に届く玉梓愛しくて

良

夢にまで見る鞆靴の原

嫺

溶けてしまへば水溜りなり

恵

喉から胸の燃ゆる熱燭

千

ナリ輝を叩く男の美学にて

孝

ナリ還暦を過ぎて生き方急変し

弘

ナウCTとCG駆使しミイラ展

民

木の芽味噌のせご飯三杯

洋

四輪駆動ぶつとばす春

之

春飛魚追って漁師勢ひぬ

良

むらさきに花の散り敷く花の蔭

啓

晴れ男ばかりか花の聖岳

や

鎌倉の五山訪ねむ花の頃

樹

静かに了はる蝶々の羽化

孝

うららかな日は雲も夢みる

を

軽きスカーフうらかな昼

民

連衆 坂本孝子 大島洋子 八代 嫺

武井雅子 林 鐵男

連衆 染谷佳之 山口美恵

市野沢弘子 繁原敏女 青島ゆみを

連衆 本屋良子 内田遊民 鈴木千恵子

青木秀樹

国民文化祭を終えて

やまぐち連句会会長 諏訪欣二

由宇の里ビッグバンかと冬の雷

お恥ずかしいことですが、国民文化祭への参加に出遅れたため、公募事業となり、当初から手弁当での出発でした。継続事業として毎年各県で行われる国文祭と違う出発時の姿は「しんどい」ことばかりでしたが、連句協会幹部の方々、全国の連衆の皆様のお力と励ましを得て、たまたま徳山にお住いの中本蒼水・七水さんご夫妻の理解と協力を得、同御夫妻の自宅を事務局として「山口連句会」がスタートしました。その上、中本さんの前向きな力量と熱意が、合併前の由宇町の教育委員会を動かし、公募事業としての国民文化祭の連句大会が段取りよくスマートに進められる最大の要因でした。その間、連句協会常任理事の八木紫暁さんが連句の手ほどきに由宇町に出かけられて連句の啓蒙に努力していただいたことも忘れられないことの一つです。

国民文化祭が近づくにつれ事務局に任せきりの私も心の昂揚は否めず、年甲斐も無くおろおろとするだけで、ストレスがたまり、不安に駆られていました。

然し私は開き直ることしか出来ません。総てを厚かましく中本さんご夫妻に任せ切つて当日を迎えました。新岩国駅は少し辺鄙なと

ころにあります。十日の吟行、交流会は勿論、十一日の本番にも直前のキャンセルはなく、実作のみの出席の方々を含め、二百二十余名のご参加を得ました。これは連句を愛される連衆の方々の思いやりのお陰と感謝致しております。ここでパンドラの箱を開けて見るとまさにビッグバンでした。何もせん長にはまさに驚きでした。連句大会運営のスタッフの気配り、心くばりには頭の下がるものがありました。新岩国でのお迎え、錦帯橋を中心とした吟行と観光案内、由宇町教育委員会全職員の皆様と地元の方々のボランティアとしての活動、会場の諸整備、ご馳走はバイキング形式をとり、数回にわたる事前の味見など、心行き届く姿がありました。

そして交流会のスタート、ウクレレによる生演奏と共にピンクのアロハとレイ姿で現れた老若を交えた由宇町の美しき人々の一団が三階から降りてくる姿には、私も舞い上がりました。会食に入り、当地文化協会会長山中克美様の歓迎挨拶、そして特別に用意されたワインでの乾杯、中本七水さんのユーモアをまじえたりードよろしく、皆様をお迎えできました。これも「ふれあいパーク」の兼田所長の隠れた心くばりでした。いよいよ翌十一日開会式の運びとなりました。気象予報どおり朝から雨で絶景という由宇沖の日の出は期待出来ませんでした。そのころ雨が上がりがけており、鳥影に霧の残る状況で、開会式は

オーブニングアトラクションとして当地の「由宇銭壺太鼓」が披露され勇壮な驚きが会場に鳴り渡りました。ついで開会宣言、諸挨拶、募吟入賞者の発表と表彰、予定時間が少しオーバーし、トークセッションに入りました。

中本蒼水さんの司会でパネラーとして竹山美代子さん（連句応用・社会復帰支援）、土屋実郎さん（文芸連句）、藤原マリ子さん（山大助教授・芭蕉の研究）のお三人から連句にかかわる素晴らしいお仕事が披露されました。会場からは拍手感想をいただき、僅かの時間でしたが、有意義なひと時をもちました。そして再び本館の実作会場へと移りました。ほぼつぼつエピソードに入ります。実作会では捌きを入れて五名が四十二点を囲み、新しい試みとして岩国市由宇中学校の生徒さん二十余名の参加があり、連句協会磯会長と連句協会宮下理事長の捌きで二巻が巻かれ、ユニークな作品が紹介されました。振り返りますと、この子供たちの連句への参加と交流は、次世代への期待と変わり行く世相の中でモデラートな風の交わりを感じました。座の文芸である連句の効用が、今回のようにたとえ公募事業でも、貧しくても、皆で力を合わせれば行えるということだと思えます。新しいひとつの風が吹いたのではないかと、感じ取つて下さることを期待致します。これもみな連句を愛する連衆のバックアップのお陰と感謝しております。猫蓑の皆様有難うございました。

手作りの国民文化祭連句大会

鈴木 了齋

今年の山口県国民文化祭での連句大会は県主催事業としての枠から外れてしまい、一時は開催そのものが危ぶまれた。しかし地元の方々のご努力によって「県民公募事業」という変則的な形で、一種の自主開催として復活の運びとなった。開催までのご苦労のプロセスは、実行委員会事務局発行のメールニュース配信を通じてつぶさに知ることができ、一参加者としても、当日に向けていやが上にも大会との一体感が高まったのである。

幸いに表彰式にも受賞者として出られることになり、実作会の捌きも仰せつかった。ところが、好事魔多し。一週間ほど前から顔の右半分が腫れ上がる奇病で入院加療の身になってしまった。一見してきわめて不気味という状態はなんとか大会前日までに脱することができたので、腫れは残っているものの、担当医に無理を言っつて一泊外泊の許可をもらう。朝病院を出て新幹線に乗り、翌日夜更けにまた病院に戻るといふ綱渡りである。ドタキャンでご迷惑をおかけしたくない一心だが、おかげでますます忘れ難い体験になった。

山陽地方に足を踏み入れるのははじめてだ。初日昼間は吟行会。宇野千代の名作「おはん」の舞台になった岩国の城下町は、錦帯橋で両

岸を繋ぐ。武家屋敷には独特の「両袖瓦」。

山頂からそれら全体を見はるかす岩国城。紅い目の白蛇。由宇の浜からは、古事記国生み神話に登場する島影。謎の自爆をとげた戦艦陸奥が今も沈む海。これらはいずれも「観光」ではあるが、たんなる観光を越える印象が刻まれたのは、周到かつユーモア溢れる案内をしてくださったボランティアガイドの方々のおかげである。ボランティアガイドのシステムがこんなに充実しているところに行つたのははじめてだ。これはもちろん、連句大会のために急遽作られたシステムではない。岩国というところにはもともと、訪れる旅人への「もてなし」の気風が溢れているようだ。それが今回の連句大会のありようの全体にも浸透していて、町中総出で心から歓迎してもらつたという、実に嬉しい印象が残つた。

大会会場は、岩国市由宇町にある銭壺山の山頂に近い「山口県ふれあいパーク」である。一日目の夕方、バスを連ねて登っていくときにはすでに暗くて海はよく見えない。

この夜の懇親会で最も印象に残つたのは、四十代から八十代までという由宇町のフラ・ダンサー数十名総出の優雅な踊りである。由宇は移民を通じてハワイとの縁が深い。それと、病中ながら一口だけ味見した「瀬祭」という地元のお酒の旨さ。新庄の「とろり」に匹敵するという声があちこちから上がる。

翌日午前中のイベントは宿泊棟からさらに

山頂近くに登った別棟で行われたが、前夜から続く激しい雨で、登っていく途中も眺望はまったく開けない。ところが、太鼓演奏と表彰式の間雨が上がって、晴間がのぞいた。休憩時間にベランダに出てみると、想像していたよりはるかにスケールの大きい瀬戸内海の絶景が眼下に広がっている。一斉に喚声が上がり、海を望む崖上の庭のあちこちで記念撮影がはじまった。ここから瀬戸内海の島々を俯瞰していると、国生み神話が腑に落ちる気がしてくる。このあたりの海を「西の松島」として売り出したという話が前日あったが、それは話が逆、むしろ松島が瀬戸内海の北方ミニチュア版なのではないだろうか。

その後はトークセッション、そして実作会だ。全国各地からのご連衆と出会える国民文化祭での連句の座は、いつもながら楽しい。昔人の旅の俳諧もこうだったにちがいない。

実作会だけでなくこの大会全体が、一つの大きな連句の座に他ならなかったのではない。やまぐち連句会と実行委員会事務局、そして地元由宇町のみなさんのボランティア精神を中心に、それをとりまく連句協会や、応募者、参加者全員の連衆心に支えられた大きな一座である。大きな、実によい一巻に連なることができた。その夜遅く東京に戻り、ふたたび病院のベッドにもぐり込みながら、そういう感慨があらためてしみじみと浮かんできたのであった。

「インターネット連句のこと」

青木 泉子

インターネット連句をやり始めて、五年経った。

ホームページにあるゲスト用の小さな掲示板で、訪問者と遣り取りしているうちに、これを使って連句が出来ると思ったのが最初である。そのうちにもっと使いやすく、ログも沢山保存出来るタイプの掲示板に替え、参加者も掲示板の数も、徐々に増えた。

歌仙からソネットまで、形式は様々、捌が
いる場合もあるが、膝送り、付け捌きでやる
ことが多い。参加メンバーは、初期の頃とは、
大分入れ替わっているが、ここ数年は、いつ
も参加してくれる常連さんが七、八人、それ
に、時々新しい人が参加して、ネット興行を
愉しんでいる。

この五年間に巻いた作品数は、正確に数え
ていないが、五十巻を越えるであろう。ネッ
トだから、お酒もお菓子も出ないが、連句を
巻きながら、様々に出る話題や情報交換が、
ご馳走かも知れない。ネット連句座のオーナ
ーとしては、お客様は神様というスタンスで
もっぱら雑用係に徹して、ネットの座が、和
やかに愉しく運ぶように心がけている。

実際の座では五、六時間で巻き上がる歌仙
だが、ネットでは、順送りでも一ヶ月はかか

る。前句を見て付けを出し、次の人が治定し、
付けを出し、と言う手順を、銘々の都合のい
い時間にアクセスしながらやるので、それだ
け時間がかかるのである。その点では、ファ
ックスや手紙と変わらない。

しかし、インターネット連句の最大の長所
は、ネットに座を設定し、連衆が同じ画面を
見て、同時同場を共有出来ることである。電
話やファックスと違い、音のしないインタ
ーネットの付け合いは、早朝でも夜中でも可能
だし、送信、保存も軽便で、場所を取らない。
アクセスすれば、いつでもどこでも、連句の
座が目に入り、誰がどこに付けているか、こ
れまでの進み具合はどうだったかが、ページ
を戻すことによつて、簡単にわかる。

偶然同じ時間に、複数の人がアクセスし、
付けに関する遣り取りが始まり、顔を合わせ
ての座に近い雰囲気が出たこともあった。逆
に、連句の行事にメンバーの多くが参加して
いて、掲示板が沈黙したこともある。ケータ
イで、外出先からも進行状態をチェック出来
るようになって、さらに便利になった。

インターネットは、臨場感と場の共有とい
う点では、すぐれた媒体である。まさに連句
向きであると言える。大都市に住む人や、大
きな結社にいる人は、場に恵まれているから
いい。周りに連句をやる相手が誰もいなかっ
たり、赤ちゃんや病人を抱えて、外出がしに
くかったりする人には、ネットなら、わずか

のヒマでも出来るであろう。また、人と顔を
合わせるのが苦手という人には、ネット連句
は、やりやすいかも知れない。

遠方に住む同士が、手紙で交わす文音は、
古くから行われてきたが、時代と共に、通信
手段も増え、表現の方法も変わった。出かけ
て行かなくても、連句が出来るようになった
のである。臨場感と、座の意識が持てるイン
ターネット連句は、今後、ますます行われる
ようになるだろうし、若い人に勧める場合は
インターネットを、視野に入れて考える必要
があるだろう。

手紙での文音から、インターネットが世に
現れるまで、ほんの十数年くらいの変化であ
る。「ネット連句なんて・・・」と、批判めい
た発言を聞くことがあるが、そう言う人も、
ファックスは当たり前のように使っている。
これも出た当初は「機械で文音なんて・・・」
と、手紙派の人から批判を受けたであろう。

亡くなった明雅先生は、ご自分はなさらな
かったが、世に始まったインターネットの付
け合いについて、理解を示しておられた。

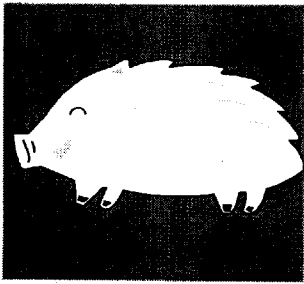
「・・・従来の連句は座による連衆心の産物
と言われて来た。このIT連句では座はとも
かくも、連衆心はなかなか生れ難いのではあ
るまいか。しかし、たとえ見ず知らずばかり
の連衆による一座であろうとも、捌きが優し
く、連衆が納得するような捌きをすれば、必
ずいつかその一座に連衆心が生れ、よい作品

が生れるように、ITの場合も捌きの力で、連衆心を生むことは可能であろう。・後略」(IT時代と連句 猫藪通信第41号(平成12年10月))

芭蕉は、全国を旅して、行く先々の見知らぬ人たちと、連句を卷いた。今もし芭蕉が生きていたら、インターネットを駆使して、日本全国は言うに及ばず、地球の向こう側の人も、積極的に連句を卷いたのではあるまいか。そう私は確信する。

今や高齢者の仲間入りした私には、自宅で楽しめる媒体として、インターネットは、無くてはならぬ物になっている。

結社で、多くの同好者と交流できる座の連句と共に、見知らぬ人とのインターネット連句も、うまくバランスをとりながら、今後も愉しんでいきたいと思う。



連句へのもぐりこみ方

山口 美恵

今は昔、会社の同僚の一人が金子兜太先生に俳句をやってみようといいたそう。

その返事が「広告の人は連句のほうに向いているでしょう」体よく俳句入門を断られたのだろうが単純な私たちは早速その連句なるものを試してみることにした。ただただ気取って五・七・五をだれかが作ると次の人が七・七を作った。その句の下に気取った俳号を記した。それでもほんとうにこれでいいのか、とちよつと心配になった。私たちは調べることにした。

図書室で連句、連句と探してみたら一冊の冊子を見つけた。名前もおぼえていない。

後ろを見ると編集者とおぼしきひとの名前と電話番号が出ていた。杉内徒司とある。

早速電話をしてみると、こちらもかなり厚かましいが電話口のその人もかなりけたはずれの人だった。

会社のこと、仕事のこと、出身地、出身校までえんえんときかれてしまった。

まるでお見合いか職探しみたいだと慄然としたが、そのあとが「うちのグループにはすば

らしい先生がいらつしやる。ともかく関口芭蕉庵にいらつしやい」と強引なお誘い。仲間へ伝えて、ともかく吉田憲助氏と私が偵察に行くことにした。

その日が明雅先生にはじめてお目にかかった日であり先生が倒れた日だった。

あの狭い庵のなかでもはるか上座にいらつしやつた先生のお体がぐらと揺れて周囲の人の間に見えなくなつてしまった。

それからのことはよく覚えていない。ただ救急車があつた石だらけの庭に入れないために吉田憲助氏が酸素ボンベをかつぎあげていたのははっきり覚えてる。

やがて回復された先生をかなり強引にお願いして会社に来ていただいたのも憲助氏の功績である。

「世界一の会社には世界一の先生が必要ですよ。ただし、その後がいけない。働き盛りの弟子どもは忙しすぎて欠席が多くいま考えてももつたない話である。

A C Cできちんと鍛えられた諸先輩とは入門の扉が違う。

いや立派な扉をこちよこちよと紙縋で突つついてなんとかもぐりこんでしまった、というところだろうか。

「連句入門」と私 島村 晁巳

先生が亡くなられてからもう三年が過ぎました。今でもあの温顔と軽く片手をお上げになったやさしいお姿が脳裏を去りません。

そして会員念願の「連句入門」第九版が刊行され沢山の連句愛好者に喜ばれています、というご報告が出来ることを心から嬉しく思う昨今です。

先生ご逝去の後会員から「連句入門」の重版を、という声が上り具体化の策を探っている折から、生田日常義さんから出版元の中央公論新社にツテがあり交渉の窓口にアプローチが出来そうだと願ってもない話があり早速ご本人、松本碧さん、武井雅子さん、小生の「連句入門重版並びに販売促進チーム」を立ち上げ活動を始めました。

出版社との交渉では常義さんが先頭に立ち奮闘され今回の成功の基礎を築いて頂きました。また奥様もたびたび一緒に頂き交渉の大きな援軍になって頂きました。特に重版に当たっての改訂箇所の手合せの際の気迫には先生のお仕事への敬慕のお気持ちがあひひし感じられ大変感動致しました。かくして念願の重版が実現し本を手にしたのが今年の七月初旬です。直後の連句協合理事会で披露したところ私の廻りに人垣ができ持参した十冊はすぐ売切れ予約を沢山頂きました。理事の

方々の熱気が快く、改めてこの本の価値を確信しました。小林しげと氏が今年の連句年鑑で述べておられる様に「連句入門」が初版の昭和五十三年から幅広く連句人の座右の書として連句の発展に寄与してきた実感を痛いほど感じました。その後は皆様の力により誠に迅速に売行きが伸び、現在百部弱の在庫のみになり出版元もびっくりするほどの順調さでした。小生はもっぱら物流を担当しましたがとにかく素早く正確にお届けする事と本が傷まずにお手元に届くよう工夫する事、ご購入頂いた方に会の感謝をきちんとお伝えする事に専念しました。その時は先生が背中でのことに後押しして下さるのを感じとても愉しい仕事でした。思えば小生が「連句入門」を手にし先生の門下生にして頂いてから十有余年が過ぎた今、本書を讀返して痛切に思う事があります。

先生は「連句入門」の冒頭で芭蕉の『俳諧は老翁が骨髓』の言をもって俳諧の素晴らしさを語っておられます。今現在我々は芭蕉が命とした「連句」に取り組んでいるのだ、という感動が改めて心に満ちてきます。

先生はまた「俳諧は銭湯では生まれぬ」と喝破されその意は『各人各様の個性を互いに認め尊重しあいながらも、俳諧に対する同行心を根底に持っている人が真の連衆である』と述べておられます。わが身を振り返るとやはり連句三昧の十数年の情性もあって心すべ

き事が出来ていず冷汗三斗の思いです。

折しも前述の本年の連句年鑑に廣木一人氏が連句の席の行儀について述べておられますが連衆としての基礎的な行儀もなっていない自分に気付き愕然としました。曰く「難句」「声高雑談」「遅刻早退」「頻繁な離席」「人の句の指合いを繰り返して我が句を求むる事」等々心当たりの慚愧ばかりで恥ずかしい限りです。座の文芸である俳諧は正に座の空気を大切にし連衆の同行心を高め巻き進めることが肝要で、行儀はその基礎であると改めて痛感しました。

これからも「連句入門」は多くの人々に連句の楽しみを広げ息の長い名著として洛陽の紙価を高め続ける事と確信しています。チームも引き続き知恵を搾り活動を続けますがこれからも皆様のお知恵を是非拝借したいのでよろしく願います。

ここでもう一つの名著岩波新書「芭蕉の恋句」についても一読をお勧めします。書店ですぐお求めになれます。先生は「連句入門」でも恋句に十頁余を裂いておられ恋の詞における談林と蕉風の違いや芭蕉作品における恋句の統計等興味津々ですが「芭蕉の恋句」はもつと面白いですよ。恋句指南書としても楽しんで頂けること請け合いです。恋句の苦手、得意の方向れにもオススメです。筆を擱くに当たりご協力頂いた方々にチーム一同心から御礼を申し上げます。有難うございました。

悼 卯遊庵志げ子様

田村満子様

歌仙 「おんめ様」 吉藤 一郎 捌

年の梅俤ぶおんめ様 吉藤 一郎

陰盃に注ぐ爛酒 橘 文子

平積みの雑誌数冊入れ替へて

橋野代々子

香箱つくる縁側の猫 本屋良子

波音に揺られゆるる月まろし 加藤道子

ちよつと斜めにやや寒の帽 大窪瑞枝

先生の作品探す美術展 本田八重子

リニューアルさる上野界限 登坂かりん

レトロバスびたりくつつく後部席 文

戯言めかし愛の囁き

流し目の藤十郎のあでやかさ

姫鱒釣りの解禁となる

快く復党叶ひ夏の月

観音めぐり杖を頼りに

忘れ物入れ歯の主の現れず

はぐれ鳶の狙ふ弁当

千丈の断崖に花咲き満てり

玄人はだし春ショール織る

文 代 八 人 道 枝 代 良 郎

ナオ永き日に幼なひたすら砂遊び

空にぼつかり軽気球浮く

E.U.を鉄道で行く独り旅

組織の指令入るケータイ

右も無く左ともなし弥次郎兵衛

常盤薄に潜む野卯さぎ

屏風前菖くゆらす女伊達

忍び笑ひの背徳の朝

残月のしらじらとして山の端

蜂の仔採りのリーダーとなり

聖体祭香炉振り来る列長く

中食告げる木鐸の鳴る

ナウ学びたし先人の智と志

世界制覇をめざす卓球

内視鏡視き手術の脳外科医

趣味も豊かに俳名を持つ

霏々と降る花に夢へと誘はれ

信濃の里はかぎろひの中

平成十八年十二月六日

於 鎌倉おんめ様

良 文 代 郎 八 人 道 枝 代 良 郎 文 八 枝 道 良 郎

事務局便り

◇猫菘会例会

亀戸天神奉納正式俳諧

日 平成十九年四月二十四日(火)

時 十二時〜十七時(受付十時半)

正式俳諧終了後、二十韻興行

於・亀戸天神社

江東区亀戸三六六一

TEL ○三三三六八一〇〇二〇

◇住所変更

中野 昌子

新住所 三鷹市牟礼二十四〜二十五〇六

◇新入会員

鷺山 京子 足立区在住

船水 暢子 八王子市在住

◇猫菘会発展基金にご協力有難うございました

山寺たつみ様 五千元

三浦 隆様 一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

普通3376045 猫菘基金

季刊 「猫菘通信」第六十六号

発行人 猫菘会 青木 秀樹

T18210003

東京都調布市若葉町

二二二一十六

編集人 猫菘通信編集部